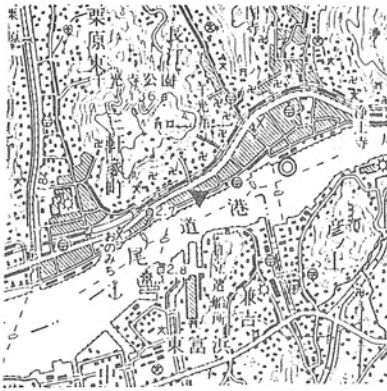


広島・尾道遺跡 (BGO1地点)

- 1 所在地 広島県尾道市土堂一丁目
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)七月～八月
- 3 発掘機関 尾道市教育委員会
- 4 調査担当者 森重彰文
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉時代～現代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(尾道)

尾道遺跡は、現在の尾道市街地地下三～四mにも達して包蔵される遺跡であり、その広がりには市街地中心部ほぼ全域に相当する約三七haを推定している。

本遺跡は、南に浮ぶ「向島」との間の幅約〇・四kmの尾道水道を天然の良港として、嘉応元年(一一六九)後白河院庁より太田荘の倉敷地に指定されたことで急速に発展した。その後、ほぼ一世紀を経た文永年間ま

では、尾道の港を媒介に独自の動きを始め、鎌倉時代末期には人口五千を超える都市に成長していたと考えられている。

発掘調査は一九七七年から継続的に行われている。何れも店舗兼用住宅などの建替えに伴う事前調査として実施したもので、間口の狭い独特の街並みのため、調査面積は限定され、十カ年近い調査で中世に及び得たのは、遺跡総面積の二五〇〇分の一に満たない現状である。

本調査も、敷地内に二・八m×二・三mの調査区を設定して実施したもので、木簡が出土したのは、現地表下約二・三mで、流入による木片堆積層中である。中世における海岸線を示すと推定される角礫・木杭が検出され、ここに上位から流入した木片が沈澱した層で、木製下駄、自然木・板とともに検出された。また堆積層から出土した他の遺物についてみると、土師質土器碗・皿・鍋、国内産陶器片、輸入陶磁器片など一五世紀末～一六世紀前半までに位置づけられるものである。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・〃 六十五〇〇人

かす二〇六分入

・〃 〇〇〇〇〇

140×37×4.5 082

(森重彰文)